

平成28(2016)年「正覚寺報」8月号

ご案内

お聴聞と人生を語る会8月7日(日)10時～

四年前に発足した「御法話会」は、発展的に首記の様に改称し地道な営みを続けています。毎月京都から若手の布教使様が駆けつけて下さいます。色も形もない法性法身の働きを本願成就して現れて下さった阿弥陀如来のお慈悲としてお取次ぎする営みでございます。

正覚寺歓喜会(かんぎえ)8月21日(日)10時～

神通第一の木蓮尊者がご自身のお母上が今はどこにどうしていらっしゃるかとご覧遊ばしたところ、餓鬼道で苦しんでいらっしゃる有様が見て取れました。

尊者は、お釈迦様に御相談になり、雨期の安居の最終日に修行僧に馳走で接待なさったところ、お母上は、餓鬼道から救われてお浄土に迎え取られたのであります。

その有様に人々が歓喜のあまり踊り出したのが盆踊りの起源だと言われております。

Rondリーナ本願寺では、昨年誕生した“Rondリーナ本願寺音頭”で盆踊りの輪ができあがります。“包んでくれる”と、阿弥陀様の攝取不捨のお心が歌の文句に姿を変えて皆様にお慶び戴いております。

これからの寺院のあるべき姿を探し求めて

戦後、右肩あがりて人口が増え、経済社会が成長する時代には、何の心配もなかった出来事が近頃目に見えるようになってまいります。

その一つは、お子さんのいらっしゃるお家のお墓の継承であります。

折角立派なお墓を建立なさったのに、将来これを継承してくれる者がおりません。

一体どうしたら良いのでしょうか。

元気な間はなかなか踏ん切りがつかません。

たまたまお墓の継承という切り口からお話を始めましたが、これは、人口流動化と減少化が

もたらす社会全体の悩みです。

先月営まれた第52回龍谷教学会議の基調講演の中でも“墓終い”が話題になりました。

寺院はこれにどうお応えしていくべきか、これまで模索して参りましたが、正覚寺としては次のような営みが定着して参りました。

遷仏(せんぶつ)法要(俗称、“おあたまし”=“尊い方がお移り戴く”という古語)を営み、お墓そのものは閉じて戴きます。石屋さんをお願いして石塔を動かし、お勤めのあと、小さなお骨壺に収骨(“お骨あげ”とも称します)して戴いたお骨は、お寺のご本堂の如来様の須弥壇(しゅみだん)の下に納骨して戴くのです。

その後はどうなるか。

それまでは墓地に足を運んでお墓参りして戴いていましたが、これからあとは、寺院のご法要にお参り戴くことがそのままお墓参りになるのであります。

ここで、お聴聞の営みが俄然光りを放って参ります。正覚寺では、まことに地道に毎月のお聴聞の活動と年間を通してその時期に合わせた伝統的なイベント法要を営んでおります。

例会活動は夜のご法座ですが、それ以外は、報恩講を除いて、お昼の座ばかりですので、遠方各地からお運び戴き易くできています。

寺院活動は、お寺のホームページでご案内しております。SNSを駆使して戴けるとなにかが、ご覧戴いて、お歳を召したご親族にもご案内戴き一緒にお参り戴ければ良いのです。

阿弥陀如来は、お喚び声になって届いて下さっています。“さあ、称えてご覧”との思召し(六字釈は発願廻向のお心)にお委せして称えさせて戴くということ、直ちに「なむあみだぶつ」と声になって届いて下さいます。こちらが受け止めやすい様に私や親族の声に姿を変えて(これを変化とも応化とも申します)“この阿弥陀をタノミにせよ”と届いて下さっているのであります。合掌。